

埼玉県立
歴史と民俗の博物館



彩の国埼玉県

THE A MUSEUM

Vol.11-2 第32号 2016.9.9

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore



徳川家康没後400年記念 特別展

「東照大権現像」(徳川記念財団蔵)

徳川家康 語り継がれる天下人

平成28年10月15日(土)～11月27日(日)

江戸幕府を開いた天下人徳川家康(1542～1616)が駿河国で没して、今年で400年になります。そのことを記念し、徳川宗家18代当主徳川恒孝とくがわつねたか氏が理事長を務める公益財団法人徳川記念財団と共催で、特別展「徳川家康 語り継がれる天下人」を開催します。

本展では、家康ゆかりの名宝や自筆書状などを展示するだけでなく、没後、東照大権現とうしょうだいこんげんとして神格化し、各地に勧請された東照宮も紹介します。埼玉県域にも大小さまざまな東照宮や家康にまつわる伝承が遺っています。本展では、家康と埼玉の知られざるゆかりもお楽しみください。



この展覧会には「語り継がれる天下人」というサブタイトルがついています。家康ほどの大人物になれば、各地にさまざまな伝承や信仰が遺り、実際、埼玉地域の各地へ家康は鷹狩に訪れ、そのことに関する逸話が今でも伝わっています。後世、市井の人々に語り継がれた伝承や、「東照大権現」となった家康への信仰にも注目することから、「語り継がれる天下人」というサブタイトルをつけました。

展覧会は3章構成で成っています。それでは、各章ごとに概要を紹介しましょう。

第1章 天下人徳川家康

第1章では家康の生涯を概観します。

家康は、天文11年(1542)、三河国岡崎城主松平まつひら広忠ひろただと正室おだいら於大おほの方のちかの嫡男として生まれました。幼名は竹千代といいました。

幼くして今川義元いまがわよしもとのもとへ人質として送られ、駿府(現在の静岡県静岡市)で幼少期を過ごします。14歳の家康は駿府で元服し、義元の「元」を与えられ「元信もとのぶ」と名乗りました。後に祖父清康を慕い「元康もとやす」、さらに永禄6年(1563)7月6日には「家康いえやす」と改名したといわれます。



図1 松平家康起請文(光西寺蔵)

その頃に発給された「松平家康起請文」が川越市の光西寺に伝存しています。これは、同年の三河一向一揆に際し発給された起請文です(図1)。

その後、家康は姉川や三方原、長篠、小牧・長久手などの合戦をくぐりぬけ、戦国大名として確かな地位を確立し、豊臣秀吉の重臣として、天正18年(1590)関東に入国しました。そして慶長5年(1600)

関ヶ原の戦いに勝利します(図2)。



図2 重要文化財 狩野探幽筆 東照社縁起絵巻巻第二(日光東照宮蔵、部分)「関ヶ原」の場面、後期展示

家康は慶長8年(1603)に征夷大將軍に任じられ、幕府を開きました。日光東照宮にはその時の宣旨も伝存しています(図3)。まさに天下人となり、以後約250年続く天下太平の世をもたらしたといえます。

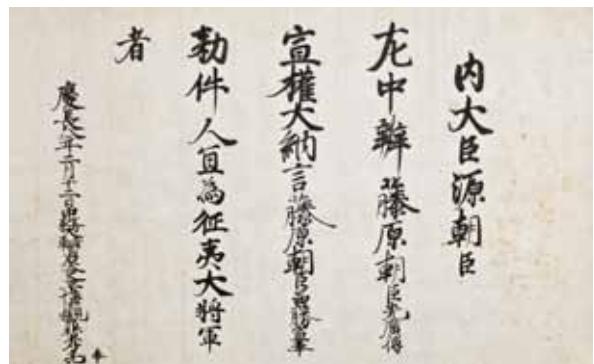


図3 徳川家康任征夷大將軍宣旨(日光東照宮蔵)

慶長10年(1605)、將軍職を徳川秀忠とくがわひでただに譲り、その2年後には駿府に移住した家康は、大御所政治おおごしよを行いました。この頃には、鷹狩のために武蔵国の各地、県内では川越や忍、越ヶ谷、岩槻などを頻りに訪れています。それは自身の健康のためや、領内視察のために行ったといわれています。その際の宿泊は、忍や岩槻、川越などの城を用いるほか、鴻巣や越ヶ谷、浦和などには御殿が建てられました。その他、各地の寺院にも滞在することがあり、大聖寺(越谷市)に立ち寄ったことが知られています。

第2章 家康の神格化と東照宮建立

第2章では、逝去した家康の神格化や、東照宮の建立を紹介します。

元和2年(1616)4月17日、家康が駿府城で没すると、その遺骸は久能山へ葬られました。その翌年には日光山へ遷葬され、日光東照社(後の日光東照宮)が建立されました。

死期を悟った家康は、「八州之鎮守」として江戸幕府そして徳川家を守護する神になることを言い遺しました。その神格化にあたり、家康の神号について論争が起きましたが、家康の側近でもあった南光坊天海(図4)は山王一実神道を根拠に「権現」号を主張。後に、秀忠の選択により「東照大権現」に決定したといわれます。

祖父家康を敬愛していた徳川家光は、建立20年の節目にあたる寛永13年(1636)に、日光東照社の大造替を行いました。その際、当初の東照社の一部は、上野国新田郡世良田村(現在の群馬県太田市)に移築され、世良田東照宮として現存しています。

また寛永10年(1633)には仙波東照宮が建立されましたが、寛永15年の大火で焼失すると、寛永17年(1640)に現在の社殿が再建されました。その棟札には「御願主 征夷大將軍源家光公」の名が墨書されています。



図4 木村了琢筆 天海大僧正像
(日光山輪王寺蔵、部分)

第3章 広がる信仰と伝承

第3章では、江戸時代を通じ県内各地に勧請された東照宮や家康の伝承等を取りあげます。

日光東照宮や仙波東照宮はよく知られた東照宮ですが、かつて県内には大小さまざまな東照宮が勧請されており、その数は70以上にも及びました。

その一つ、鴻巣市の勝願寺は、家康が鷹狩で訪れた際、中興二世円誉不残上人の学識に触れ、帰依した寺院として知られます。浄土宗関東十八檀林の一つにも数えられ、後に秀忠や家光も参詣しました。

家康の次男である結城秀康が下総国結城藩から福井藩へ転封になると、家康の命により結城城の建物が勝願寺へ移築されました(図5)。このうち大方丈には、金の間と呼ばれる東照大権現を祀る東照宮が後に勧請されました。建物は現存しませんが、勝願寺には「東照宮」と書かれた扁額や木造の東照大権現坐像(図6)が大切に伝えられています。



図5 宝永五年伽藍絵図(勝願寺蔵、部分)



図6 木造東照大権現坐像(勝願寺蔵)

展覧会では、勝願寺だけでなく、ときがわ町の慈光寺や小川町の普光寺に伝わった東照大権現像の掛幅や、個人で勧請した東照宮なども紹介します。ぜひ、語り継がれた家康の姿をお楽しみください。

(展示担当 浦木賢治)

[文化遺産活用調査事業]

『新編武蔵風土記稿』総合調査について

埼玉県教育委員会では平成28年度から、生涯学習文化財課が主管課となって『文化遺産活用調査事業』を新規事業として立ち上げて、そのうちの2つを当館が事務局として担うことになりました。2つとは、無形民俗文化財調査事業「巡り・廻りの民俗行事」と『新編武蔵風土記稿』総合調査事業です。

『新編武蔵風土記稿』とは、だいがくのからみはやしじやつまい大学頭林術斎の建議により徳川幕府が編纂した全265巻・付録1巻から成る武蔵国の地誌です。しょうへいざかがくもんしよ昌平坂学問所に編纂事務局が置かれて、編者代表の間宮士信以下延べ42名が動員されて、文化7年(1810)から文政11年(1828)まで約20年間を費やして完成し、天保元年に清書本が将軍に献上されました。

献上された時の書名は「新編武蔵風土記」というもので、内閣文庫に保存されています。江戸幕府の権限をもって完成させただけに、記述も微に入り細に行っていますが、村によって精粗にばらつきがあるのは仕方がないところです。長い間日の目を見ることなく、江戸時代には刊行されなかったものの、かぶらやまむら大里郡青山村(現熊谷市)の根岸武香の努力により、ねぎしたけか内務省地理局から明治17年に初めて刊行されました。

ちなみに、刊行された本はオレンジ色で目立つ表紙の和装本80冊という体裁でしたが、文字の部分は活字印刷で、絵の部分は伝統的な整版印刷の手法によるものでした。絵の部分の板木の半数近くは根岸家の番頭をしていた八木橋家から埼玉県が入手して、現在では当館の所蔵になっています。

ここでは、調査のあらましを記したいと思います。調査実施要項では5カ年計画で実施することとし、県内を『新編武蔵風土記稿』が書かれた時代(文化・文政時代)の16郡(葛飾・新座・足立・入間・高麗・比企・横見・埼玉・大里・男衾・幡羅・榛沢・那珂・児玉・賀美・秩父)に分けて、年度割りして実施するとなっています。現行の市町村に分けて文化財のリスト化をしていくという方法もありますが、現在では廃止されてしまった郡もあり、かえって現行の行政体との比定に手間取ることもあるので、容易にリストの作成ができる方法を選択しました。

この調査の目的は、『新編武蔵風土記稿』の埼玉県域に記載された史跡、文化財等について、学芸員それぞれの専門分野から総合的な調査・研究を行い、今まであまり知られていなかった郷土の文化遺産を掘り起こし、その成果を展示等に活用することです。展示の場合は、有形資料が中心になりますが、講座・講演会を実施したり、館の研究紀要に調査報告を発表したりして、県民に還元することが求められています。

調査方法としては、江戸時代に作成された地誌で基本資料である『新編武蔵風土記稿』に載せられている村ごとに社寺の所有する物や塚などの遺構(いわゆる文化財)をリストアップして、市町村の教育委員会や当該社寺に専門分野の学芸員が聞き取り調査をすることによって現時点での残り状況を確認して、場合によっては現地に於ける詳細調査で遺存状態を確認するという流れになっています。

詳細調査を行う必要がある場合には、写真撮影や調書作成を行い、調査終了時には一般県民に広く公開することを目指して、ひとりよがりな文章表現にならないよう工夫をする必要があります。



今年度の総合調査では葛飾郡、新座郡、足立郡を取り上げます。

年度ごとに成果の還元が求められていることから、平成29年1月21日(土)の午後2時から開催される歴史民俗講座で「『新編武蔵風土記稿』に見られる文化財」と題して、今年度分の中間報告をさせていただき予定で文化財のリストアップを進めております。

(資料調査・活用担当 針谷浩一)

「巡り・廻りの民俗行事」について

はじめに

民俗行事の中には、神仏が一定の地域や家々を巡ったり、廻ったりすることが行事の中心となっているものがあります。

こうした行事は、複数の市町村にまたがって行われるものや、地域内の家々を神仏が一軒ずつ順に廻っていくものなど、規模や内容は様々です。

埼玉県立歴史と民俗の博物館では、現在、県内で行われているこうした「巡り・廻りの民俗行事」の調査事業を実施中です。

今回、私たちが調査の対象としているのは、従来から注目され、多くの見物客を集める神輿渡御や山車・屋台の巡行のような、華やかな行事ではありませんが、いずれも地域に根差した重要な無形民俗文化財です。

終わりなき巡回 ― 本川侯の廻り地蔵 ―

ここでは、一例として羽生市本川侯の廻り地蔵を紹介します。本川侯では、一年365日、約100軒の家のどこかで、背負い厨子に納められた地蔵菩薩像が祀られています。お地蔵様は床の間に安置され、供物が捧げられ、家族によって祀られます。その数日後には、お地蔵様は家の人に背負われ、隣の家へと移動します。お地蔵様が今どの家で祀られているかは、送った家と迎えた家の人しか知りません。次の家へ送っていく日程に決まりはなく、迎えた翌日の場合も、一週間後の場合もあるのです。

お地蔵様が回る順番だけは「地蔵様巡回帳」で決まっています、送り・迎えの連鎖によって、お地蔵様は地域の家々を一定でない、長い時間をかけてぐるぐると廻っているのです。

地蔵祭り

そんなお地蔵様ですが、年に一日、しかも僅か数時間だけ、本川侯の千手院（真言宗智山派）で、多くの人々の参拝を受ける機会があります。8月23日、もしくは24日は、北埼玉地域の各所で「地蔵祭り」といって、お地蔵様に団子などを供えてお祭りする機会となっています。



組頭に背負われて千手院に向かう地蔵尊(平成27年)



地蔵祭りで参拝を受ける地蔵尊(平成27年)

千手院でも、23日の宵から、境内の六地蔵を祭る地蔵祭りが行われますが、この日、廻り地蔵も境内に迎えられ、僧侶による法要の後、人々の参拝を受けるのです。

この日、お地蔵様をお寺へお迎えする「組頭」は、事前にお地蔵様の所在場所を確認しておく必要があります。広く配達を行っている商店などに地蔵様の行方を尋ね、次第に搜索範囲を絞り込んでいきます。

8月23日夜、廻り地蔵は、再び組頭の背に負われ、安置されていた家へ戻されます。そして、多くの人にその所在場所を知られぬまま、本川侯の家々を廻っていくのです。

(展示担当 内田幸彦)

秋の意匠「竜田川」

～常設展示第4室・美術展示「詩歌の美」(9月6日～11月20日)によせて～

ちはやぶる 神世もきかず竜田川
韓紅に 水くくるとは一

平安時代初期の歌人、在原業平の歌です。「竜田川を真紅に絞り染めにするなどということは、大昔の神代の話にも聞いたことがない」という意味の歌で、百人一首にも入っているため御存じの方も多いことでしょう。紅葉が川面に散る情景を、真紅の染料を用いた絞り染めの布に例えた歌です。清く澄んだ水と紅色の鮮やかさが目に浮かび、また川を布に見立てるスケールの大きさを感じる歌です。作者の業平は「伊勢物語」のモデルともされる人物で、情熱あふれる歌を多く残していることから恋多き貴公子としても有名です。清和天皇の後となった二条后・藤原高子との若き日の恋物語もよく知られています。「古今和歌集」では、この歌は二条后のもとで、竜田川に紅葉が散り流れる光景を描いた屏風絵を題材に詠んだとされています。そうすると、この歌の紅葉の真紅も、かつての恋人への思いの表現とすることもできます。

少し話が逸れますが、あまり百人一首に熱心ではなかった私が初めてこの歌を意識したのは、高校生の時に友人に勧められて読んだ古典落語の名作「千早振る」によってでした。落語の内容は、有名なこの歌について、なじみの八五郎に歌の解釈をたずねられた御隠居が、自分も意味を知らないことを言いだせずに見栄を張り、だじゃれやこじつけで珍解釈をひねり出すというものです。その解釈と歌本来の意味やイメージとの落差が笑いのツボで、歌の誤解釈というだけではさほど面白くはないでしょう。誰もが元の意味を知っている歌だからこそ、その滑稽さも際立つのです。

さて、竜田川とは現在の奈良県の北西部、大阪府との境にある山々の総称である竜田山を流れる川です。「万葉集」では「竜田山」を詠んだ歌が多いのですが、平安時代に編纂された「古今和歌集」では「竜田川」を歌うものが多くなっています。竜田川と紅葉は秋の情景として定着し、絵などに多く描かれるようになり、単に「竜田川」といえば、流水に紅葉が散る絵や文様などの美術品の意匠を指すようになりました。竜田川図屏風、竜田川文蒔絵箱などといえます。詳細に風景を描いたものから単純化された文様まで、さまざまなバリエーションがあり、秋の代表的な文様といえます。

文様としては流水に紅葉だけでも十分に美しいのですが、それだけではないのが歌と結びついた日本の美術の楽しさです。「ちはやぶる」の歌からの連想だけでなく、竜田山を神格化したものが秋を掌る女神・竜田姫であることから女性的なイメージもあります。歌の意味や背景を知ってこそ、判じ物のような楽しみといえるでしょう。

「ちはやぶる」の歌を含む百人一首は、鎌倉時代初期に藤原定家が撰んだという説が有力です。江戸時代には庶民の教養として広まり、かるたとして遊ぶようになったのもこの時代です。前述の落語「千早振る」も原典は江戸時代の逸話で、落語は八五郎が娘に歌の意味を聞かれて答えられずに御隠居に助けを求めてやってきた、ということから始まっています。百人一首は子どもの歌の入門としても親しまれていたようです。

常設展示第4室・美術展示では、11月20日まで「詩歌の美」と題し、重要文化財「三十六歌仙額」(川越市・仙波東照宮蔵)をはじめ、歌枕を題材とした工芸品など、詩歌と美術の結びつきを楽しめる展示となっています。ぜひご覧ください。

(展示担当 池田伸子)



左：竜田川文蒔絵櫛・笄(当館蔵) 右：櫛の文様拡大図

日本の服飾文化と衣紋道

「衣紋道」という言葉をご存じでしょうか。着物に馴染みがある方は、「衣紋掛」や「衣紋を抜く」という言葉を耳にするのではないのでしょうか。「衣紋」とは、日本の伝統的な衣服である装束を形良く、着くずれしないようにする着装方法を指す言葉です。

日本では、7世紀初めに遣隋使を派遣して以来、使者や留学生らが持ち帰ってくる大陸文化を重んじていましたが、寛平6年(894)の遣唐使廃止後は、日本の気候風土に適した独自の文化や美意識を見直すという流れが生まれ、国風文化が成立していきます。

国風文化が花開いた平安時代に生まれたのが、いわゆる十二単（正式には、五衣唐衣裳といいますが）に代表される女房装束や、束帯・衣冠・狩衣・直衣などの公家装束であり、日本の服飾文化の原点です。

ところで、「十二単は、本当に12枚の着物を着ているの？」という質問をよくいただきます。「十二」というのは、枚数が多いことを表しています。つまり、たくさんの単（衣）を重ねて着るという意味で、実際に12枚と決めて重ね着しているわけではありません。20枚重ねたという記録もありますが、だいたい8枚前後だったようです。こうした重ね着は、元々は板敷の部屋でじっとしている女性たちが体を冷やさないように工夫されたものでしたが、次第に豊かさの象徴となっていきました。

さらに時代を下って平安後期になると、公家装束は「強装束」に変化していきます。強装束とは、衣服の生地を厚くしたり、衣服を糊付けして外見を強張らせることで、かつちりと美しく整える装束のことです。この強装束に対して、それ以前の緩やかな輪郭を描く装束を「柔装束」といいます。

「衣紋道」とは、この時代の変化によって複雑になり、個人で着ることが難しくなった装束の着付けの専門的な技術を伝承するものです。その開祖は、後三条天皇の孫で、「花園の左大臣

と呼ばれた源有仁(1103～1147)です。有仁が創り出した衣紋の技術は、徳大寺家と大炊御門家に伝承され、室町時代に徳大寺家の流儀を山科家が、大炊御門家の流儀を高倉家が受け継ぎました。山科家が主に装束の製作を司り、高倉家が主に装束の着装を伝承していましたが、時代が下るとともにそれらの住み分けはあいまいになっていきました。山科家はその後も引き継ぎ宮中や公家の装束に、高倉家は武家の装束に関わることとなります。これは、山科流は華麗で優美、高倉流は簡素で機能的という現在の流派の着装の違いに現れています。

明治時代になると両家の衣紋奉仕は廃止されましたが、宮中の伝統的な儀礼における正装（宮廷服）として装束は欠かせないため、両家による衣紋担当者の養成は現在も続いています。現代に受け継がれる「衣紋道」は、伝統的儀礼などの限られた機会と時間において、最高の着付けを行うための技術といえるでしょう。

埼玉県立歴史と民俗の博物館では、「十二単・小袿の着装体験」と「十二単・小袿と男子装束の着装体験」をそれぞれ年に3回実施しています。「衣紋道」を追求されている方々に平安時代から続く装束を着付けていただく貴重な機会です。みなさんの参加をお待ちしています。

(学習支援担当 阿部楓子)



十二単の着装体験の様子



歴史と民俗の博物館イベント情報(10月～1月)



埼玉県のマスコット
コマン

■特別展「徳川家康—語り継がれる天下人—」を、10月15日(土)～11月27日(日)まで開催します。

10月

- 1日(土) 十二単・小袿の着装体験、裏方探検隊
- 8日(土) 裏方探検隊
- 14日(金) 江戸組紐ロングネックレス作り
- 15日(土) 特別展「徳川家康」オープン
特別展展示解説、裏方探検隊
- 22日(土) 特別展展示解説、裏方探検隊
- 25日(火) 埼玉の人物「渋谷定輔」オープン
民俗コラム展示「梨作り」オープン
- 29日(土) 特別体験「ペーゴマ教室」、裏方探検隊
- 30日(日) 特別展記念講演会①

11月

- 5日(土) 歴史民俗講座、裏方探検隊
- 12日(土) お囃子体験教室「さんてこ囃子」
特別展展示解説、裏方探検隊
- 14日(月・祝の日) 特別展展示解説
復元住居公開、裏方探検隊
- 19日(土) 国宝公開「太刀」オープン、裏方探検隊
- 20日(日) 特別展記念講演会②
- 22日(火) 美術展示「木版の美」オープン
- 26日(土) 火おこし体験教室、裏方探検隊
- 27日(日) 特別展展示解説

12月

- 3日(土) 十二単・小袿と男子装束の着装体験
裏方探検隊
- 6日(火) 季節展示「国指定の都市祭礼」オープン
- 10日(土) 歴史民俗講座、裏方探検隊
- 17日(土) 裏方探検隊
- 24日(土) 裏方探検隊
- 27日(火) 美術展示「祝いの美」オープン

1月

- 2日(月) 博物館でお正月「福笑い」、裏方探検隊
企画展「祝いの民俗」オープン
- 3日(火) 博物館でお正月「投扇興」、裏方探検隊
- 7日(土) 民俗工芸実演「小正月の造形」
裏方探検隊
- 14日(土) 十二単・小袿の着装体験、裏方探検隊
- 21日(土) 歴史民俗講座、ミニ銅鏡作り、裏方探検隊
- 24日(火) 埼玉の人物「小谷三志」オープン
- 28日(土) 思い出のスイッチ — 懐かしの昔遊び —
裏方探検隊

次回企画展

祝いの民俗—ハレの造形—



平成 29年 1月 2日 (月・休) ～ 2月 12日 (日)

～博物館でお正月～

新年の1月2日(月)と1月3日(火)の
両日は臨時開館いたします。

※イベントは事情により変更する場合があります。
また、事前に申込みが必要なものもありますので、
詳細はお問い合わせください。



交通機関
東武アーバンパークライン(野田線)
大宮公園駅下車徒歩5分

埼玉県立 歴史と民俗の博物館

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore (編集発行)

〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町4丁目219番地
TEL. 048-641-0890 (管理)
048-645-8171 (学芸)
FAX. 048-640-1964
<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



埼玉県立歴史と民俗の博物館だより
Vol.11-2 (通巻)第32号
2016年9月9日発行